



講義名：「美術を見ることで何が学べるか～日本美術を中心に～」

### ☆生徒から講師の先生へのお礼と感想

1年 S.Kさん

先日はお忙しい中、私たち横浜清風高等学校の生徒のためにお時間を割いて頂き、心よりお礼申し上げます。今回の講義で、「美術を見る」ということについて学ぶことが出来ました。

私の母は女子美術大学短期大学部の卒業生であり、両親は高校時代にアトリエに通っていました。両親の影響で私も幼い頃から何度も美術館に足を運び、次第に美術に関心を持つようになりました。そして今では、美術に関する仕事に就きたいと考えています。そのため私は、今回の体験模擬授業で美術学系を選択することにしました。稲木教授の授業を受け、最も印象に残っているのは、長澤蘆雪の「虎図」のお話です。私はこの襖絵を初めて知りましたが、虎が描かれた裏側に面白い仕掛けがされていることに、とても興味が湧きました。教授がおっしゃっていたように、実際に見に行かなければ、裏に描かれているものが「虎図」と同じ場面を表していることに気が付かないと思いますし、墨で描かれた迫力を感じることは出来ないと思います。私は印象派やシュールレアリズムなどの海外の画家たちの作品しか鑑賞したことがない為、いつか「虎図」をこの目で見てみたいと思うと同時に、日本の画家たちの魅力にも触れてみたいと感じました。

また、日本と西洋の違いについての話では、「実際に見る」ということだけでなく、作者の生い立ちや、その頃の出来事を理解した上で作品を見ると、また違った捉え方になるということが、鑑賞の面白さの一つであることを学びました。私はこの話を聞いて、そのように鑑賞をすることで、作者の「作品を通して伝えなかったこと」をより強く感じられるのではないかと考えました。

さらに、単数だけでなく複数の作品と比較することで、新たな発見を生み出せることが分かりました。例えば、西洋では昔から「大きいものが良い」とされてきましたが、日本では昔から「小さいもの、繊細なもの」が美しいとされてきました。これらの話を聞き、国語の現代文の授業で扱った「水の東西」でも「東洋と西洋の考え方の違い」について学んだことを思い出しました。「水の東西」では日本の「鹿おどし」と西洋で生まれた「噴水」とを比較しながら、違いについて説明されていました。このことから、一つの作品について考えるだけでなく、二つの作品を比べて考えることによって、また違った見方になったり、気付かなかったことに気付くことができたりするのではないかと思います。

誰かに鑑賞されて、初めて価値が生まれる芸術作品は、鑑賞する側も見ると学び、成長しなくてはならないことに気付かされました。今回の授業を今後役立てられるよう、作品に対して疑問を抱き、情報を蓄え広い視野で考えることを心がけながら、これからも鑑賞を楽しみたいと思います。この度は、貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。



## 1年 Y.Hさん

稲木先生

今回はお忙しい中時間をとって講義をしてくださりありがとうございました。

「美術は表現する者と鑑賞をする者、この両者によって成り立っており、片方が欠けると成り立たない。」この言葉がとても印象に残りました。私は今まで趣味でたくさん絵を描いてきましたが、描いたものを誰かに見せることはなく、ずっと引き出しの奥に入ってます。世界にある『名作』とはあくまで自分ではない他人に鑑賞され評価されたものであって、自分の目で見ただけで考えることをしないのはもったいないと伺いました。私の絵も、今まで自己評価で終わっていたことが勿体ないと思いました。これからは機会があれば、描いたものを誰かに評価してもらい、画力を向上できるようにしたいです。

ありがとうございました。